

対人ストレスユーモアコーピング尺度 (HCISS) の作成と信頼性、妥当性の検討

○ 楯本知子¹・山崎勝之²

(¹東亜大学人間科学部・²鳴門教育大学大学院学校教育研究科)

Key words: 対人ストレス・ユーモアコーピング・尺度開発

目 的

コーピング方略としてのユーモア (以下、ユーモアコーピング) と精神的健康に関する実証的な研究の多くは、欧米で行われてきた。欧米におけるユーモアコーピングとは、直面する問題に対して視点を変え笑い飛ばすことで困難な状況を克服しようとするやり方と定義されている (Martin, 1998; Martin & Lefcourt, 1983)。ユーモアコーピングが抑うつや不快な気分を低減させることは、横断研究だけでなく縦断研究によっても明らかにされている (Lefcourt, 2001)。

一方、ユーモアの種類や使い方は、文化や社会によって大きく異なると指摘されている (大島, 2006)。楯本 (2007) は「文化コンテクスト (context culture)」と「集団主義」という文化的視点から日本人のユーモアコーピングについて論考し、その特徴を対人関係で機能する点に見出している。つまり、日本人のユーモアコーピングは、ウチ集団での対人関係で経験されるストレスを予防・低減するために、また恥に対処するために用いられている (楯本, 2007)。

本研究では日本人のユーモアコーピングを対人ストレスユーモアコーピングと名づけ、大学生向けの測定尺度 (Humor Coping with Interpersonal Stress Scale: HCISS) を開発し標準化することを目的とした。

方 法

調査対象者：以下の3つの大学生サンプルを対象とした。

1. 大学生 987 名 (男性 487 名、女性 509 名)
2. 部活やサークル、ゼミなどの 11 の小集団 (男性 57 名、女性 39 名計 96 名)
3. 大学生 37 名 (男性 21 名、女性 16 名)

調査材料：上の3つのサンプルに対して、それぞれ調査材料 1~3 を用いた。

1. 2 回の予備調査を経て精選された HCISS12 項目
2. 対人ストレスユーモアコーピングの特徴を表現した 2 つの文が示されたもの (以下の仲間評定法に使用)
3. RIR 手帳 (B7 判)：対人ストレスユーモアコーピングに関するやりとりと行動評価シートが綴られた携帯用手帳 (以下の Rochester Interaction Record に使用)

手続き：HCISS の最終項目を選定し因子的妥当性と内的整合性を検討するために、サンプル 1 を対象として調査材料 1 に対して 5 件法 (まったく行わない~いつも行う) で回答を求めた。サンプル 1 のうち 370 名の大学生 (男性 160 名、女性 210 名) に 5~6 週間の間隔において調査材料 1 を 2 度実施し、安定性を検討した。構成概念妥当性を検討するために仲間評定法と Rochester Interaction Record (RIR, Wheeler & Nezlek, 1977) を用いた。仲間評定法ではサンプル 2 を対象として調査材料 1 に対して自己評価、調査材料 2 に対しては回答者以外の各構成員についてどの程度あてはまると思うかを 5 段階 (1~5 点) で評価させた。RIR では 2 週間のあいだ 10 分以上続くやりとりを調査材料 3 に即時に記録させ、評価対象のやりとりに関しては 11 段階 (0~10 点) で評価するよう求めた。

結果と考察

最終項目決定と因子的妥当性の検討：主因子法による因子分析の結果、第 1 因子のみ固有値 1 以上を示した。男女別の分析においても同様の結果が得られたことから、次元尺度が妥当と判断した。各項目の因子負荷量と項目間相関を吟味した結果、最終項目として全 16 項目を選定し (Table 1)、HCISS が確定した。確認的因子分析の結果、適合度指標の RMSEA の値は.019 を示し、因子的妥当性の高いことが確認された。

内的整合性の検討： α 係数が.86 と高い値を示したことから、内的整合性の高いことが確認された。

安定性の検討：検査一再検査の相関係数が $r=.78(p<.001)$ を示した。よって HCISS は十分な安定性を満たしていると言える。

構成概念妥当性の検討：仲間評定法では、HCISS 得点と仲間評定得点の相関係数を男女別に求めた。男性では $r=.39(p<.01)$ 、女性では $r=.49(p<.001)$ を示した。自己評価と他者評価の間に中程度の正の相関が見られたことから、HCISS の構成概念妥当性が確認された。RIR では、RIR 得点を目的変数、性と HCISS 得点を説明変数、やりとり回数を統制変数として重回帰分析を実施した。その結果、HCISS 得点は RIR 得点に対して正の影響力をもつことが明らかになった ($b=.11, \beta=.36, p<.05$)。また RIR 得点は女性よりも男性の方が高いことが示された ($b=2.05, \beta=.40, p<.01$)。RIR の結果からも HCISS の構成概念妥当性が確認された。

得点分布の正規性の検討：歪度は.03、尖度は 3.05 を示したことから、HCISS の得点分布は正規分布からの歪みが小さいと言える (市原, 1990)。

性差の検討： t 検定を行った結果、HCISS 得点は男性よりも女性の方が有意に高かった ($t(985)=-4.61, p<.001$)。

以上のように、HCISS の因子的妥当性、内的整合性、安定性、構成概念妥当性および得点分布の正規性を示す証拠がすべて提示され、HCISS は大学生の対人ストレスユーモアコーピングを測定する精度の高い尺度として完成した。

Table 1 各項目内容と因子負荷量

No.	項目内容	第1因子
9	自分の間違いや失敗を人に見られたら、それをネタにして笑いを取ろうとする。	.73
12	相手と気まづくなったりしたら、なにかおもしろいことを言って一緒に笑う。	.67
8	相手からかわれたら、自分もおもしろがって一緒に笑う。	.61
3	人前でけなされたら、けなされた内容にまつわるエピソード (逸話) をおもしろおかしく話す。	.60
7	人と話しているときに気まづい沈黙が流れたら、その場の雰囲気をなごませるために笑いを取ろうとする	.59
4	自分のみっともないところを人に見られたら、笑ってすませる。	.58
11	人にばかにされたら、気の利いた冗談を言って切り返す。	.58
5	お互いの考えが合わないときは、ユーモアを使って相手と衝突しないようにする。	.54
2	言い過ぎたと思ったときは、ギャグを言って取り繕おうとする。	.53
10	相手を怒らせてしまったときは、ユーモアを使って相手の怒りをやわらげようとする。	.51
1	人前で失敗したりすると、自分でも可笑しいと思って一緒に笑う。	.50
6	ドジなことをして人に鼻で笑われたときは、笑ってやりすごす。	.48

(KUNUGIMOTO Noriko, YAMASAKI Katsuyuki)